
君の声を買わせてくれる？

森羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の声を買わせてくれる？

【Nコード】

N6471B

【作者名】

森羅

【あらすじ】

作曲に重点を置く青年ミュージシャンは今まで、歌い手や歌詞を必要だと思っていなかった。『僕の曲に声はいらない…。心に響くのは音だけ。』しかし、とある収録の最中偶然にも聞いた声に聞き惚れてしまう。イメージ通りの声を持つのは声音のプロ、声優で。一体あの人は誰なんだ？君は男性なのか？女性なのか？奥手な青年ミュージシャンとラックボイスを持つ声優の恋への序曲をお楽しみ下さい。

a c t・001 まだ見ぬ声（前書き）

こちらで書かせて頂く初作となります。お見苦しい点などありましたら、是非ご指導をよろしく願います。基本的に切ないすれ違い、想いを男性目線で展開します。へたれな男性がお嫌いな方はご注意ください。

a c t ・ 0 0 1 まだ見ぬ声

僕は君の声に恋をした。

まるで、それは光りの衝撃のような印象で
でも、緩やかな風に包まれるような感覚で
僕の心を捉えて放さない。

ああ、この人に僕の曲を歌ってもらえたら…

僕のすべてを愛せるかもしれないのに…

だから…

【君の声を買わせてくれる？】

毎年相も変わらず、東京の夏は暑いとテレビの中の人は言う。
“今年も猛暑になりそうですね。” その通りだと僕も思う。

まだ7月の始めだというのにジリジリと照りつける、太陽。それを受け入れられずに反射するアスファルト。この異常なまでの気だるさはどちらの所為なのだろうか。

なんて、下らない事を考え込めば更に憂鬱な気持ちになる。

7月某日、ここは都内レコーディングスタジオ。とはいえ、スタジオというほどの趣きは感じられない場所。

環状通りとは少し離れた、細い路地を抜けると、そこは閑静な雰
囲気を醸し出す。

しかし、建物の古びた外見とは裏腹に、最新鋭の音響設備と高品

質の録音機器を備えたこの場所は、腕の立つミュージシャンや音楽関係者密かに集まる事で有名な場所であった。

僕の名前は朝倉圭介、もうすぐ二十代ともお別れだけど、幸か不幸か幼い面立ちと高くない身長の所為で若く見られる事もしばしば。それが嫌なわけではないけど、なめられて見られては困るから髪を金に染めてみている。もうかなり、いじりすぎて白金に近い色。

職業は、一応ミュージシャンかな？主に作曲をメインに仕事をさせてもらってる。

自分自身が腕の立つミュージシャンに入るかどうかはわからないけど、この場所を使うようになってからは自宅スタジオにいる時間と同じくらいの時間を過ごしていると思う。

1Fから4Fまでのすべてが貸しスタジオになっていて、地下の大ホールも使えるという音楽家には打ってつけの場所。

2FにあるのはCとDの二つのスタジオ。今僕は、そのDスタジオにてレコーディングの真っ最中。

収録曲はすべてインストによるものなんだけど、曲によってはボーカルを入れたりする。

自分で歌えばいい。って周りの皆は言うけど…。

まあ、その、僕はあまり歌うのが好きじゃないから。ボーカル曲の場合は外部のミュージシャンを使ったりする。

今日は外部から協力してくれるボーカルさんとの打ち合わせ兼収録。ついでにレコード会社のマネージャーも同席中。

「それで、今回の曲ですけどイメージは『深海』です。それにあった声でお願いしますね。」

「はあ…。深海ですか。具体的にどういった声で歌えばいいんですか？」

「そうですね。深い海なんですけど実は冷たくないよ。ってカンジで。」

「…いつもなんですけど、朝倉さんの指定ってアバウトですよ。」

「そうですね？僕はなるべく分かりやすいように言ってみてんですが…。」

ボーカリストとの打ち合わせはとても難しい。なかなか曲のイメージを伝えられないし、伝わっていても僕がいいと思える声でない

時もあるから。

もともとインスト曲には歌詞なんかないから、言葉で表現することが難しい。

だからいつもボーカル入りのインストにはとても時間がかかってしまうんだ…。

自分の納得出来るものでないと自分の曲を愛せないから…。

「でもさあ、朝倉くん。やっぱり売り物にするんだから、ちゃんと歌ってもらわないと困るでしょう。」

「…そりゃあ、そうなんですけど…」

ボーカルの人に上手く指示を出来ていないせいなのか、レコード会社のマネージャーが横やりを入れてくる。

「ここはどうだろう、朝倉くん。インスト曲に詩を合わせるんじゃないくて、セオリー通りに歌詞に曲を合わせてみては？」

「そうですね、朝倉さん。あなたは実力あるんですから、歌い手に合わせた曲も作れるんじゃないですか？」

「…出来なくはないですけど。…でも、それは…。」

自分の好き勝手を言っただけ、自己の音楽感を押し付けてくる彼ら。結局は自分の仕事を楽にこなしたい歌い手と、楽に儲けを出したい会社。

僕が作りたい音楽は、僕が心から望んで作り出したもの。

確かに、歌詞に合わせて作曲することはできるよ。作曲を仕事にしている以上、仕事として頼まれることはあるから…。

けれど、そんな音は僕本来の曲じゃないと、彼らはわかっているんだろう。

僕は心で感じたものを音という言葉にして、旋律という感情をこめる。

今まで僕がその歌詞に感動して曲を作った事は無いし、ましてや歌手の歌声に聞き惚れて曲を作ったことも無い。

僕が本当に心で感じなければ、それは僕の音楽にはなれない。だから歌詞は後から、曲に合わせてもらうしかないんだ。

「やはり個人のインスタアルバムとはいえ、詩や歌手に合わせてもらったほうが、うちとしては助かるんですよね、朝倉くん。」

「…僕がそう思える相手に出会えばいいんですけどね…。」

ため息が出た。

今日は打ち込みも一緒に調節したいから、早めにボーカル部分だけ録音しちゃおうと思ったのに、そんな気がしなくなってきた。…。

く……
ふ……

♪・・・♪

隣のスタジオから曲が聞こえてきた。
ああ、隣も誰かが使い始めたんだな…。

（男の人が…。でも、結構…上手い？）

初めはそんな程度に思っていた。

「じゃあ、一度録音は終わりにして休憩いれましょう。丁度、レコード会社の人も帰ったみたいだし。」

「わかりました。じゃ、外でタバコ吸ってきます。15分くらいしたら戻ってきますんで。」

「はい、いつてらっしゃい。僕はこれから調整に入るから戻ってきたらボイストレーニングしててね。」

ボーカルの彼は、はい。なんて言っただけで外に出て行った。声を売りにしてるわりには喉を大切にしないんだな…。

僕の曲イメージも上手く伝わってないみたいだし、もう次に頼むのはやめよう。

誰もいなくなつて静まり返ったDスタジオには僕一人だけで。いつもの空間に戻っただけなのに、ああ、一人のほうが気が楽だなあ。と思ってしまう自分がいた。

あまり気乗りしないけど今録った音を聞きなおそうと思った時だった。

♪ . . . ♪

♪ . . . ♪

隣のＣスタジオで曲が変わった。それに伴い、歌う人も変わったみたいだ。

今までは男の人が歌っていたけど今度は女性の声になっている。

（へえ……。かなり高いのに、綺麗に高音が出るんだね……。）

女の人の前に歌っていた男の人も綺麗なテナー音域の声の人だった。

音階も発声も綺麗だし、はっきりいって僕のインスト曲を歌ってもらったボーカルの人よりずっと上手いと思う。

でも、こっちの女の人もすっごく上手い……。なんて言うのかな、声で感情表現するのが上手ってうか、切ない思いがひしひしと伝わってくる、そんなカンジ。

あれ？今日、Ｃスタジオって何の収録だっけ。確か何かのシングル収録って受付は言ってたけど……。何の？

僕はその時、だだの好奇心だけだった。

さつき、台無しにされた気持ちを紛らわしたくて気が付いたら、スタジオを抜け出していた。

歌の上手い人に会えば、それを作っている人に会えば、僕の気持ちも触発されて治まるかと思つて…。

隣のＣスタジオ前に来てみた。

丁度、歌声が終わったみたいだ。スタジオの中から“お疲れ様でしたー”なんて人の声や時間の打ち合わせのような声がする。

しばらくすると中から人が出てきた。

どこかで見覚えがある人のような気がする。思い出そうと、頭の中の記憶の海を泳いで出てきた名前は…。

「あつ。辻プロデューサー！」

「あれ、朝倉くんじゃないか。奇遇だね、君もレコ録り？」

「はい、隣で。」

「へえ、じゃあさつきまで聞こえてた曲は朝倉くんの新曲か。どーりでいい曲だと思ったよ。中の子も誰の曲ですか？つてすごく気に入ってたし。いつ発売するの？」

「そんな…、まだ予定なだけで…」

「うん、そうか。君は自分の音楽にはすごく拘るからね、商売人としては難しいが、音楽家としてはいい事だ。」

「…ありがとうございます。」

この辻プロデューサーは僕の音楽感をわかってくれる数少ない人だ。

以前、この人からの依頼でサントラを編集したことがあるけど、僕の納得のいく作品が出来上がるまで待っていてくれた事がある。

「ところで、辻プロデューサー。あなたがこのスタジオ使ってるって事は、今回はここで収録ですか？」

「そうなんだよ、このジャンルにしてはめずらしいだろう？」

そう、辻プロは大手アニメプロダクションと契約しており、アニメーション関連の曲を主に製作している。

「今回もなんかのアニメ曲ですか？」

「そう、いま人気のアニメキャラクターの歌が出ることになってね。キャラ別に収録してるんだ。今日は1日目だし、声優さんたちの希望でこのスタジオ借りたんだよ。」

「へえ。このスタジオを知ってるなんて珍しいですね。」

「私も始めて使わせてもらったが、いいスタジオだね。気に入ったよ。それに、君が使っている所を見ると良才音楽家の隠れ家というのは本当だったしね、朝倉くん？」

「いえ、僕なんかまだまだなんですよ。」

さり気なく、人を上手に誉められる所は変わっていない。本当に何気ないけど、確かにとても嬉しかったりするんだ。彼の下でなら

どんな人でも自分の才能を伸ばしていけるような気がする。
この人が凄腕のプロデューサーと呼ばれる所以はそこにあるのだ
ろつ。

「ところで、朝倉くん。君はここで何していたのかな？」

「あつ！はい。えーと…」

どうしよう。

気晴らしに曲をこっそり聞いてました…。

…なんて、言ってもいいのだろうか。

「…隣からすごく綺麗な歌声が聞こえてきたので、つい…。」

嘘はついていない。…多分。でも、歌声にひかれて出てきたのも事実だし。

「丁度、僕も隣で声撮りしてたんですけど…。なんか思うように行かなくて。そしたら、隣から曲が聞えてきて、綺麗な声だなんて、思っただけなんです。」

「歌声…、曲じゃなくて？君が？」

何か珍しいものでも見るように、僕を見つめる。

そして、ふと思いついたように僕の肩を軽く叩いた。

「それはいい声だったかい？」

「はい。歌詞はよく聞き取れませんでしたけど、声質は綺麗に聞き取れました。」

「そうか、君だったらどちらの声が巧いと思う？」

どちら…。それはつまり、先に歌っていた男性か後から歌っていた女性かを聞いているんだよね。

だとしたら、僕は…。

「男性の方も気になるけど、やっぱり女性の方ですね。表現力がすごかったと思いますから。」

どうしても、さっきまで自分の曲に起用していた彼と比べてしま
うから。

「なら、一度、会ってみるかい？」

続く。

a c t ・ 0 0 1 まだ見ぬ声（後書き）

まだヒロイン（？）が出てきておりませんが、一部完結までは書き上がっておりますのでご安心下さい。長い文章をここまで読んで下さりありがとうございます。何かございましたら、ご遠慮なくご指導下さい。

「なら、一度、会ってみるかい？」

突然の辻プロデューサーの言葉に一瞬呆気にとられてしまった。

「君が良ければ、スタジオに入ってもいいんだよ」

「え？い、いいんですか？まだ収録中なんじゃ…。それに、僕部外者だし…。」

「いや、構わないさ。それに、収録は今さつき終わったばかりだしね。私は君を見込んでいるから、誰も文句は言わないよ。」

「それに、今ならまだ彼も帰ってないだろうし。」

何だかんだで、僕は今、お隣のスタジオにおじゃましています。

そして、さつきまで録音していただろう男性の曲を聴かせてもら

っています。

何だか歌詞は歯が浮くようなモノばかりだけど、曲にとっても合った声質だからしっくりきている。

ああ、やっぱりこうして聞いているとこの人の巧みさってのがよく分かるなあ…。

「…思った通り。でも、ちょっと…残念。」

「ごめんね、朝倉くん。どうやら彼はもう帰ってしまったようだ。ラジオがあるっていうのでね、すまない。」

さっきよりも些か、元気がなくなっただように僕に謝っている。

「いえ、そんな。謝らないで下さい。突然来た僕が悪いんですから。」

「いや、しかし誘ったのは私だ。彼が帰った後とは知らず、申し

訳ない事をした。」

このスタジオは入り口が一つでも出口がそれだとは限らない場所だった。つまり裏口がたくさんあるわけだ。

「とんでもない。こうして声を聴かせてもらってるだけでも十分満足ですよ。」

そう言っすこし笑ってみせると、辻プロデューサーも苦笑気味ながらも笑い返した。

むしろ、声の主に会えなかった事が残念なのではない。

僕が残念だったのは、この男性の声も女性の声も両方、同じ人だって事だ。

しかも、辻プロデューサーはさっきから“彼”って言っている…。
てことは、あの綺麗な女性の声も男の人が出していた事になるよね…。

そうとは知らず、感動していた自分が恥ずかしい。
さすが、声を売りにしている声優だけあって女性の声もお手のものって事が…。

でも、それにしても表現がいやに女性っぽかったけど…。いやい

や、それも声優の凄さなのかもしれない。

けれど、男性であろう事を抜きにしても、この歌声はすごいよ。胸にくる。

彼なら、僕のあの曲イメージも上手く表現してもらえるかもしれない。

今、何度目かになるリピートを再スタートさせた所だった。

「いいな……。こんな人に歌ってもらいたかったな……。」

「相当、彼がお気に召したようだね。」

「え……？ いや、その。今、僕が起用しているボーカルの人は何かイメージが合わなくて、この人なら上手く表現できそうだなって思っただけです。」

「……本当に珍しい。何か起こるんじゃないか。」

「え？何ですか？」

また、考え込む様子の辻プロデューサーを横に、僕はリピートを繰り返した。

「もし、君が良ければなんだが。さっきまで君のボーカルが歌っていた曲を、僕に預けてくれないかな。もちろん、歌詞付きでね。」

「…どういう事ですか？」

僕が少し怪訝そうな顔をしていた為だろうか。安心させるように、静かに頷いた仕草を見せた。

「3日後にここで、また収録があるんだ。歌のあるキャラ全員分の巻末のメッセージ収録がね。その時、彼も来る。そこで、彼に試しに君の曲を歌ってもらおうかと思ってね。どうだろうか？…君が望めばの話だけどね。」

辻プロデューサーの突然の申し出にただ僕は目を丸くしているだけだった。

「無理にとは言わない。君が自分の曲に並々ならぬこだわりを持っているのは知っているから。だけど、君の心に届いた声ならば、一度聞いてみたいと思わないか。自分の生み出した曲を。」

「……………是非っ、お願いします!!」

頭の中がうまく回らなかったけれど、口から出てきた言葉に、辻プロデューサーは満足そうに頷いてくれた。

その後、僕は自分のスタジオに追われるように駆け戻った。急いで一枚のCD-ROMを機器から取り出すと、歌詞が書かれている紙を驚掴みにして飛び出した。

「うわっ！？朝倉さん、何やってるんスか？」

スタジオの外に出ると、休憩から戻ってきたらしいボーカルの人^が立っていた。

タバコの匂いが喉と鼻にまとわり付いた。

「急で悪いけど、もう今日は帰ってもいいから。」

「あ、いいんすか？じゃあ、お言葉に甘える事にします。んで、次はいつ来たらいいんすかね？」

タバコの匂いは離れない。どうやら相当、ふかしてきたようだ。まったく声を売りにしているわりには致命的だね、君は。

「次は……いいよ。もう、ないと思うから。」

「は！？ちょ、どーいう事っすか？！」

「どうやら、僕のイメージに合わないみたいだから君には降りてもらっよ。また、機会があれば声掛けさせてもらっから。じゃあね。」

息継ぎ早に、簡単に説明を終えて、Ｃスタジオに傾れ込む。

外で、“ちょ、朝倉さん！？どーいう事ですか！説明して下さいよ！！”なんて喚く声が聞こえるけれど、そんなのはどうでもいいんだ。

今はこの手の中にあるものを辻プロデューサーに届けなくちゃいけないから。

ボタンと重い扉を背中であめて、自分以外に聞えないような小さな声で呟く。

「悪いけど…、もう僕にはあの声しか聞えないから。」

その後、辻プロデューサーにCD-ROMと歌詞を渡して僕はスタジオを後にした。辻プロデューサーが彼の仕事先に届けてくれるそうだ。

外に出ると、風なんかちつとも役にたたないくらいの暑い陽射しが待っていた。肌に照りつけるあの光がヒリヒリと痛い。

まぶしいのはわかっているけど、僕は太陽を手をかざして仰ぎ見てみた。

辻プロデューサーによると、彼の名前は“陽野潤”^{ひのじゅん}というらし

い。たぶん、声優としての名前だろうけど。

「元気で明るい人でね。とてもいい子だよ。」

辻プロデューサー曰く、太陽のような人なんだそうだ。何だか僕とは正反対の性格みたいだな、と感じた。

CD・ROMを渡して貰う時に、2つ条件を出させてもらった。
一つは曲のイメージを伝えないこと。好きに歌ってもらって僕の曲をどう感じて声にするのかを知りたかった。
そして、もう一つは…。

「え？君の名前を出さないでくれて…？どういう事だい？」

「僕の名前を…。僕の曲を知らないであれを聞いた時、歌い手から見たらどう感じるのかわかって…。それを知りたいんです。」

無理なお願いだったのだろうか、辻プロデューサーが難しい顔をして僕を見ている。けれど、すぐにいつもの表情に戻った。

「……。本当に珍しい事があるもんだね。君が歌い手の意見を聞きたいだなんて、きつと雨が振るんだよ。」

「嫌だな。そんなに変な事ですか？」

「……………いや。（十分、大変な事なんだが……。本人はいたって自覚なしか……。）」

「プロデューサーの事だから、きつと僕の条件を守ってくれと思う。」

太陽を見ていられなくなった僕は地下駐車場へ続く階段へ逃げ込んだ。

車のエンジンを着けてエアコンが回るのを待ちながら、3日後の事を考えていた。

一体、あの人は僕の曲をどう歌い上げるのだろうか？

どんな声で歌うのだろうか？

僕の曲をどう感じるのだろうか？

期待と不安とすこしの焦燥感に胸が高鳴って仕方がない。

ああ、早く。

早く時が過ぎればいいのに…。

早く会いたい、あの声の持ち主に。

僕は知らないうちに、まだ見ぬ声の持ち主に心を寄せていた。
この後、どうなるかはわからない。けれど今は胸が一杯で他の事が考えられなかった。

そう、その時はまだ…。

彼が彼女だなんて、想像もしなかったんだ。

“陽野 潤”が女の子だなんて…、僕が知る由もないんだ。
ホント、声優ってすごいんだなあ…。

夏先の陽射しに煽られて、見えない歯車がゆっくりと回転を始め

た。

僕はあの声の主にまだ出会ってすらいないけど。

続く

“今日も真夏日になるでしょう。ですが、通り雨にはご注意ください。”

相も変わらず、テレビの中の人と同じ台詞を繰り返す。

ああ、きっと今日も暑いんだろうな。

けれども、今はこのうだるような暑さも僕を憂鬱にさせる事はない。

それくらい、高まる気持ちが胸をいっぱいにしてるんだ。

僕は辻プロデューサーと約束した時間より少し早くスタジオの前に来ていた。いつも時間ギリギリの僕にしてみたら考えられない事だ。

はやる気持ちが背中をぐいぐいと後押す感じがする。

僕はスタジオの重い扉をそっと開けた。

“…。それじゃあ、これからも応援ヨロシク!!”

“ここまで聞いてくれたみんな、どうもありがとう。”

“また、逢える時を楽しみにしてるからね。”

“（せーの）バイバイ”

中へ入ると、複数の人の声がスピーカーから聞えてきた。声優の人達がメッセージ収録をしている様だ。

収録室にはガラスで隔てられた編集室を背にして、5人の声優と思われる人が録音をしていた。

声を聞いた感じではみんな男の人みたいだけど…。

辻プロデューサーが僕に気付いたように、唇に人差し指をあてながら手招いた。

「（待っていたよ、朝倉くん。もうすぐ収録も終わるから、少し待っていてくれないか。）」

「（ありがとうございます。わざわざ、すみません。）」

「（いいんだよ、私が言い出した事なんだから。）」

辻プロデューサーはそう言うと、隣にいたスタッフにOKサインを出すように指示をした。

そして収録のランプが消えるのを待つて、側にあったマイクで中に話し掛けた。

「みなさん、お疲れさまでした。これで、キャラソンの収録は終了です。忙しい中、こうして集まってもらって悪かったね。また、次もよろしく。」

辻プロデューサーがそう言うと中から声優達も“お疲れっスー！” “どうもありがとうございます。”などと答えが返ってくる。

「はい、お疲れさま。それでは、解散。あ、そうそう潤くんはそのまま残ってね。」

“はい。”

辻プロデューサーの声に答えるように1人の声優が片手をあげた。思ったよりハイトーンのスプラノボイス。

次々と中の声優達が帰っていく中、残った人物に目を凝らす。肩に掛かるくらいの髪をワインレッドに染めて、所々に黒のメッシュが入っている。

まだ、背を向けているので顔は見えないけど…以外とちっちゃいな…。

全体的に華奢で腕なんて真っ白で…。あれじゃまるで女の子みたいじゃないか。

え？

ちょっと、待って。

今の声って、一体誰？

まさか、

まさか、まさか。

用意はいいかい？なんて僕に聞いて、曲を流そうとしている辻プロデューサーに恐る恐る振り返る。

そして、彼のクセを思い出した。

「あの、辻プロデューサー。ちょっと質問いいですか？」

「ん、何だい？ちゃんと潤くんには曲を覚えてきてもらってるから、安心してくれていいよ。」

「いえ、そうじゃなくて…。ええと…いまさらなんですけど…」

そう言って、ガラス越しに見える人物の背中を見る。

“陽野 潤”の背中を。

「彼つて……男の人、ですよ？」

「……何を言ってるんだい？潤くんは女の子だよ。」

やっぱり。

なんだほら。

そうか、安心した。やっぱり、女の子……？

「そうですか、女の子…って、えええええっツ!？」

「何をおっきな声出してるんだ、朝倉くん。あっ!」

僕の声に驚いた辻プロデューサーの指が、曲のスタートボタンを押した。

部屋の中に僕の曲が流れだす。

忘れてた。

忘れていた、忘れてた。

どうして忘れてたんだろう。辻プロデューサーのクセを。

そう、彼は。他者の指す時に誰彼構わず、“彼”と形容するクセがあるんだ。

それが、男の人だろうと女の人だろうと構いやしない。

なんで、こんな大切な事を忘れてしまったのだろう。やっぱり、この暑さの所為だろうか…。

うん、そういう事におこつ。そうだ、全部暑いのが悪い。気付かなかったのは僕の所為じゃない…、たぶん。

軽く目眩がした。

何もしていないのに疲労感に肩がこる。僕ももう、年なんだろう
か。

幾度となく聞き返したイントロ部分を、いまだ自己完結していな
い頭でぼんやりと聞いていた。

その頭の片隅で、陽野 潤の声を捉えた。

“それじゃ、入りますねー！最初は男の子バージョンで歌います
よー？”

曲が、
流れる。

歌詞が、
紡がれる。

声が、
聞こえる。

あの声に乗せて、
曲が歌になる。

すうっと、
頬を駆け抜ける風のように、
然に耳に入ってとけた。

ああ、思った通りだ。

この声が紡ぐ歌詞は僕の中に当たり前のように入っていく。

この前まで起用していたボーカリストの歌い方とは全然印象が違う。

なんて歌唱力なんだろう。

いま僕は。

僕の曲が、歌に変じる瞬間を目の当たりにしているんだ。

“…。歌い終わりましたー！もう一回いきますか、プロデューサー？”

彼女の声に、はっと我に返る。

僕は彼女の歌が終わる声が聞こえるまで、ぼんやりとしていたようだ。

隣にいた辻プロデューサーが僕に尋ねた。

「どうだった、朝倉くん。もう一度歌ってもらったかね？」

「…え…？ああ、はい！お願いします！」

「そうか。それじゃ今度は普通に歌ってもらおうか。彼本来の声はそれだから。きつと何か感じるはずだよ。」

そう言って、にやりとした笑いをもらす、辻プロデューサー。

再び、曲が流れた。

先ほどの心地から気が抜けていた僕は、彼の笑みを見過ごしていた。

その笑みの本意を掴むことが出来なかったのだ。

さっき以上の衝撃を受けるなんて。

彼女の本来の声は、キャラの為に作られた声よりもずっと、

僕の心を捉えて放さなかった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6471b/>

君の声を買わせてくれる？

2010年12月15日03時00分発行